



平成28年度指定
スーパーグローバルハイスクール
研究開発実施報告書・第5次



PDA 全国高校即興型
ディベート大会



地域リーダーズシンポジウム
水害からの復興



天明小フィールドワーク
「私たち×SDGs」



科学部「集まれ！理系女子」
第4回九州大会参加

令和3年3月
栃木県立佐野高等学校

巻頭言

栃木県立佐野高等学校・同附属中学校長 青柳 育夫

2021年3月末をもって、2016年度から5年間の指定を受けて取り組んできた本校のSGH事業は一区切りをつけることとなりました。これを機に、この5年間に総括し、次の5年間で目指す方向性について報告いたします。

本校のSGH事業のテーマは、「地域貢献から世界の社会課題解決を目指す、田中正造型グローバルリーダーの育成」でありました。郷土の誇りである田中正造翁の「真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし」という言葉は、今の言葉で言い換えると、地球規模の「持続可能な社会」を目指すことであり、2015年に国連総会で採択された「持続可能な開発目標」(SDGs)に繋がるものでした。

本校では、生徒による課題研究のテーマとしてSDGsの17の目標に匹敵する「公害や災害からの復興」「自然・生命」「食料・エネルギー・水」「環境と経済・法律」「まちづくり・コミュニティ」「人権・教育・文化」の6領域を設定し、持続可能な社会の実現に関わる様々な社会課題の解決を目指してきました。こうした課題研究を行うことを通して、①課題を発見し向き合う力、②論理的・批判的に思考する力、③協働して課題を解決する力、④情報を発信する力、⑤英語で伝える力、⑦グローバル社会に貢献する高い志とチャレンジ精神、といった「グローバルリーダーとしての資質・能力」を育成してきました。

生徒全員による課題研究は、当初は全国的にも先進的なもので、前例がなく手探りしながらのスタートでしたが、5年間の試行錯誤の中で、生徒、教師、保護者のみならず、地域社会や行政、研究者等を巻き込み、大きなうねりとなって「シンカ」を遂げてきました。その結果、課題研究の実績は、本校のアドバンテージとして内外に認知されるようになり、「総合的な探究の時間」となった今でも、探究活動のトップランナーとして、ロールモデルの役割を果たしています。また、この間にSGH事業を体験した生徒たちは、課題研究やディベートなどの取組を最大限に生かして大学受験に挑み、SGH以前には成しえなかった結果を残しています。

さて、今年度はSGH後の次の5年間に本校が何をめざすかについて、校内で何度も議論を重ねてきました。生徒や教員、保護者のみならず地域社会にとって「幸せな学校」とすべく、「幸せな学校をつくろうプロジェクト」(幸せプロジェクト)を立ち上げ、中高の全教員に加え、生徒や保護者、地域社会からも意見を聞いてきました。そこから得られた結論は、郷土の偉人田中正造翁をロールモデルとした原点に立ち返り、地域との連携を強化した「Sano グローカル構想」として結実しました。そこで身に付ける資質・能力を「探究力」と「人間力」の2本柱とし、それを支える12の力を育成することとした。新構想は、本校の教育目標である「自他の生命と人権を尊重し、正義と平和を愛する心をもった、『国際人として活躍できる真のリーダー』の育成」をこれまで以上に推し進めていくものであり、生徒がここで学べてよかったと思える「幸せな学校」に繋がるものであると信じています。さらに、このことは小松先生が次の5年間の挑戦の方向性として提示してくださったESG(環境、社会、ガバナンス)に配慮した学校運営の実現と表裏をなすものでもあると考えています。本報告書では、特に今年度の成果と課題に加え、次の5年間の展望等を掲載いたしましたので、ご一読いただき忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

最後に、日頃から貴重な御指導・御助言をいただいております、本校グローバル教育統括アドバイザーの東京海洋大学小松俊明教授、宇都宮大学松金公正教授、そして運営指導員の皆様、更には課題研究等でお世話になった大学関係者の皆様、佐野市、地元企業、各種団体等の多くの方々、栃木県教育委員会の皆様に感謝申し上げます、今後ますますの御支援・御協力をお願いし、本報告書の巻頭言といたします。

SGH 佐高の次なる挑戦は ESG

栃木県立佐野高等学校（グローバル教育統括アドバイザー）

国立大学法人東京海洋大学 小松俊明（教授）

本稿では SGH 佐高の 5 年間にわたるグローバル教育を踏まえ、次の 5 年間の挑戦について、その方向性を考えるヒントを提示したい。思い返せば、私にとって初めて佐高との縁が生まれたのは 2015 年のことだが、佐高の教師たちの当時のグローバル教育に向けた高い志とその本気度は今でも鮮明に思い出す。以来 5 年間、佐高の生徒たち、教師や保護者、地域の住民に至るまで、佐高を応援する誰もが授業や課外活動で学びを深化し、自らの持つ潜在能力を進化させ、真価を發揮したことで、インスパイア（刺激）された人生の貴重なひと時をともに過ごしてきた。もちろん私もその一人である。この結果、佐高関係者の誰もが社会課題の Thinker となり、佐野市とグローバル社会のネットワークを深めることに貢献した。

2021 年 3 月をもって佐高の SGH に一区切りがつく。そこで今後のことを考えるキーワードとして、ESG（環境、社会、ガバナンス）を提示しておきたい。ESG と言えば ESG 経営、ESG 投資という言葉が広く知られているが、本稿では ESG の考え方が、グローバル教育を進化させたい高校教育の現場にはとてもなじむということについて指摘をしておきたい。

ESG を考える前提として、まずは SDGs（エスディーゼイズ）に触れておきたい。佐高でも、ことあるごとに SDGs をテーマにした活動をしてきた。SDGs とはグローバルな社会が持続可能な開発を続け、よりよい社会を実現するための国連目標である（2015 年に提言、2030 年の達成を目標）。SDGs の具体的な目標については、佐高に限らず全国の高校生の間でも認知度が高まり、その考え方は広く浸透した。持続可能な社会を実現する目的（目標）として SDGs を理解した今、次に必要なのは持続可能な社会を実現するための具体的な手段である。

SDGs を実現する手段として、世界の企業が実践するのが ESG である。E は Environment（E：環境）、S は Social（S：社会）、そして G は Governance（G：企業統治）のことだ。環境への負担軽減、社会問題の解決、そして法令順守による経営の健全化やセキュリティ強化など、ESG に配慮した経営を企業は実践している。この結果、ESG への配慮が充実した企業の価値は高まり、長期的に信頼される企業とみなされる。実際、世界の投資家も ESG に配慮した事業活動を展開する企業への投資を増やしている。この世界的な兆候が、SGH を卒業して次なる段階へ進化する高校の教育現場に示すことは何であろうか。それは佐高が ESG（環境、社会、ガバナンス）に配慮した学校運営を実現することだ。つまり、「高校生にどう SDGs を教えるか」という次元ではなく、佐高が持続可能な教育機関であり続けるために「佐高自身が ESG に配慮した学校運営に本格的に取り組むこと」である。「教える」のではなく「自ら実践する姿を示すこと」、それこそ究極の教育ではないだろうか。感受性豊かな高校生たちは、そのつぶらな瞳で我々大人たちの「あり方」をじっと見ている。多様性を教える学び舎がもし多様に配慮した職場でなかったら自己矛盾である。教育の本質を見つめ直したい。

佐高 SGH とデジタルトランスフォーメーションの可能性

宇都宮大学 国際学部 教授 松金公正

栃木県立佐野高等学校・附属中学校の5年目のSGH活動は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の世界的拡大が急速に進展する中、幕を開けることになった。

年度当初、生徒は高校に登校することが叶わず、通常の高校生活をおくこともままならない中、どのようにSGH活動を継続していくのか、先生方と議論した。これまで当たり前であり、またSGH活動の根幹をなしていた「自由な移動」と「密な人的接触に基づくコミュニケーション」が大きく制限されることとなり、グローバル化そのものが今後どうなるのかという点にも疑問符が付された。簡単に超えることができていた国境線が大きな壁となり、COVID-19への対応として、人々の活動にどれだけの制限をかけるのかという点に関する国家間の新たな認識の違いも浮き彫りとなった。しかし、できないことを悔やむのではなく、今、生徒とともにできることは何か、そしてその可能性を模索し、積極的に取り組んでいく、という方向性は当初から共有できていたと記憶している。

先生方の支援の下、生徒たちは、オンラインを通じた課題発見とリサーチ・クエスションの設定から、頻繁な直接交渉ができない中での調査・研究、そしてプレゼンテーションまで、従来に劣らない高いパフォーマンスを示すことができたと思う。特に熊本の水俣高等学校との合同発表会は圧巻であった。年度当初は存在すら知らないかっただであろうWeb会議サービスを用い、クラウドに格納されたデジタル資料を駆使し、的確なプレゼンテーションを展開する佐高生の姿がそこにはあった。そういう意味では、佐高デジタルトランスフォーメーション(DX)とでも言うべきものの胎動を感じた1年であった。もちろんこのような成果は、これまで4年間のSGH活動の地道な積み重ねがあったからこそ生まれたものであることは間違いなく、DXへの対応が佐高生の目指すグローバル人材に不可欠であることが実感でき、どのように「シンカ」させていくべきかという課題も明確になった。

「危機は、新たな可能性を連れてくる」

今後、COVID-19の拡大に一応の区切りがつく日はやってくる。そして「早く元のようにな・・・」と思っている人も多いであろう。しかし、我々は「グローバル」において、単純に元に戻ることはできない大きな変化をこの1年で経験してしまった。急速に拡大した疾病は、まさにグローバル化の進展に伴う副産物であり、そしてその拡大は、移動や接触を伴わない新たな可能性を我々に示してくれた。もちろん、直接的な交流が不可欠であることは言うまでもないことであり、更なる強化を図るためにも、ニューノーマルとして、双方をどのように組み合わせていくのか、継続的に実施していくことを望みたい。佐高の5年目のSGH活動は、そのような期待をもたせるのに十分な成果を出してきたと思う。

目 次

第 1 章	令和 2 年度研究開発完了報告書	1
第 2 章	研究開発の内容	
1	研究体制	2 1
2	SGHキックオフセレモニー（中止）	
3	中高各学年のSGH活動実施概要	
(1)	中学 1 年	2 3
(2)	中学 2 年	2 5
(3)	中学 3 年	2 7
(4)	高校 1 年	2 9
(5)	高校 2 年	3 1
(6)	高校 3 年	3 3
4	課題研究	
(1)	高校 1 年～地域課題研究	3 4
(2)	高校 2 年～異文化研究	4 8
(3)	高校 3 年～キャリアパス探究	5 4
5	SGHクラブの活動	
(1)	研究班（海外）	5 7
(2)	研究班（国内）	6 1
(3)	ディベート班	6 6
(4)	フランス語	7 0
6	海外研修（中止）	
7	授業のシンカ	
(1)	学校設定教科目「CTP（Critical Thinking Program）」	7 2
(2)	学校設定科目「グローバル情報」	7 5
(3)	アクティブラーニング	7 7
8	SGH活動の成果の発表・普及・啓発	
(1)	課題研究発表会	8 9
(2)	他校種への普及活動	9 4
(3)	各種行事、講演会等での発表・大会、コンテスト等への参加	9 6
(4)	各種広報活動	9 9
第 3 章	研究開発の効果と評価	
1	コンピテンシーおよび課題研究に関するアンケートの分析	1 0 1
2	課題研究のルーブリックによる評価	1 1 3
3	クリティカルシンキングの項目反応理論（IRT）に基づく試験による評価	1 1 6
4	授業評価	1 1 8
5	学校評価	1 2 0
6	目標設定シートの到達度	1 2 3
7	運営指導委員会およびアドバイザー会議	1 2 7
8	5年間のまとめ	1 2 9